

ライフケアガーデン湘南

症 例 概 要 利用者氏名：90代 男性 要介護2

利用期間 ：令和6年3月～現在

経 過 ：独居生活を送られていた。妻は当施設に入所（現在はご逝去）。長女がいるが、30年以上絶縁状態で会っていない。令和5年5月に急性心筋梗塞にて入院歴あり。30年ほど前に帯状疱疹を患い、後遺症で右脇腹に痛みが残る。膝の痛みや右手4,5指に麻痺がある等、独居生活に限界を感じ当施設に入所となる。

内 容

当時奥さんのみが入居されていた。時間の経過とともにご本人の生活も困難となり、奥さんが過ごされている当施設の雰囲気や支援体制に安心感を持たれ、入居を決意された。夫婦部屋の空きはなかったものの、奥さんを自身の居室に招いて一緒に過ごされていた。食事の際には隣同士で座り仲睦まじい様子が見られ、充実した日々を送られていた。しかし、奥さんの認知症進行とADL低下が目立つようになり、心配そうに寄り添われる姿が多くなっていった。

令和7年11月上旬、奥さんが逝去されると、深い悲しみから食事摂取が進まず、無気力な状態が続き、「自分もそろそろ向こうに行かなきゃ」と否定的な言葉を言われるようになる。そのころから入院費や歯科へ多重に振り込むなど金銭管理が困難になった。our teamでは、介護職・看護職がユマニチュードケアを用い、目線を合わせて名前を呼び、ゆっくりとした声掛けや手に触れる関わりを大切にしながら、食事や散歩に付き添い、安心感と尊厳を守るケアを継続した。また、日々の会話や他ご入居者との交流を促し、孤立しない環境づくりを行った。

次第に「妻の分まで頑張って生きなきゃね」と前向きな言葉が聞かれるようになった。

娘さんとは疎遠であり協力が得られない状況であったが、ケアマネが娘さんや司法書士、弁護士と様々な話し合いを続けた。その結果、30年疎遠で身元引受人は代行業者である程の状態だったのが、面会に来て顔を見て帰るほどまでになった。

介護職や事務職で、奥さんの納骨や市役所での手続き等に付き添い、墓参りに同行しご本人だけでは対応が難しい事や移動の安全確保に対して手厚いサポートを行った。

スタッフによる家族のような愛情ある親身な関わりの中で、奥さんとの思い出が詰まったアルバムや世界旅行の写真を笑顔で見せて下さるようになった。深い悲しみから立ち直り笑顔を取り戻し、ご家族との関係もサポートできている本事例を、キラキラ介護賞に推薦する。